

獄 中 記

<福 山 辰 夫>

第 一 回

皇紀 2652 年[平成 4 年・西暦 1992 年]

4 月 14 日 (火)

春はあけぼの。

やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる 雲のほそくたなびきたる。

(以下略)

平安時代中期の作家・歌人である清少納言が執筆したとされる、随筆『枕草子』の冒頭（第一段）に出てくる有名な一節をつい口ずさむ、そんな春陽の気漂う『東京拘置所』での最後の朝を迎える。昨日、『宮城刑務所』に移管との告知をされ、予め検査を終え纏めてあった私物を抱え、『長野刑務所』へ押送の為に出発するマイクロバスに便乗して「JR 上野駅」に向かう。

駅までの道すがらは、暫く見られぬことになるだろう都心の街並みをしっかりと脳裡に焼き付ける。両手には手錠（*ワッパ）をはめられ、ワッパに繋がる紐で腰の周りを括り付け（*腰縄）て、その紐の先端を刑務官（*看守）の一人が握っている。勿論、ワッパをはめられている両手は布製のカバーで隠されているが、2人の屈強な男に挟まれて、屈むようにして両手を前に突き出し、手首に灰色の布を巻いている様はどう見ても滑稽である。

上野駅に着くと、押送には手慣れているといった感じの責任者である係長が、先頭に立ち4人分の切符を取り出す。その後を、小生と刑務官2人が改札を抜けて、東北新幹線下り線ホームへと足早に進む。新幹線を待つ間も、ホームの隅ではスーツを着た3人の男達に囲まれ、人目を憚るようにして佇む。午前6時50分過ぎ、下り盛岡行き『やまびこ』が構内に滑り込み、開扉と同時に飛び乗るようにして乗車する。

窓際の席に座わせられた小生は、娑婆の名残を惜しむが如く、食い入るように窓外を眺める。やがて福島県辺りから、未だ三分咲き程度の山桜の光景が目の前に広がり、既に東京では桜も散っていた事を思えば、これからの10年を「みちのく」の地で寒さに耐えながら務めねばならないのかと想像すると、少々気が滅入る。

午前9時15分、「杜の都」仙台到着。駅ビルの階段を降りると、『宮城刑務所』の公用車である黒塗りのトヨタクラウンが、迎えに来て待機していた。駅からは、車で15分も掛からない距離に在る『宮城集治監』といわれた、明治時代からの名残である赤煉瓦塀の正門を潜り入所。押送の東京拘置所の刑務官は「移管通知書・身分帳等書類」の引継ぎ行い、「福山、くれぐれも体に気を付けて一日も早く出所できるように頑張れ！」と、ありきたりの言葉を残して帰って行った。

流れ作業的に、入所告知～身体検査（勿論、裸体で四つん這いになって肛門の内部に隠匿物の持ち込みがないか、係官が硝子棒を突っ込んで確認する）～私物検査を終え、工場に配役となるまでの約二週間は「考査期間」となり、その間に生活をするようになる新入訓練棟へ。

そもそも当所の場合は、東北矯正管区内（青森県・秋田県・岩手県・山形県・宮城県・福島県）における基幹施設となっている為、「赤落ち」した初犯から再犯の者を同管区内から、当所内に在る『分類センター』に集めて、各人の知能指数や性格等の適性検査と行動訓練を約2～3ヵ月間受けた後、その適正と犯罪傾向によって少年刑務所（A・B級）、成人刑務所（A・B・LB級）、医療刑務所等と振り分けられるまでの期間を過ごす所である。

全ての入所手続き完了し、若い刑務官に連行されて『分類センター棟2階9室』独居房に入室。分類センター棟はこの春に新築されたばかりで、まだペンキ塗料の匂いが漂うこの独居房から、残る十年の務めがスタートする。

余談ながら、考査班担当の佐々木看守部長は、とにかく真面目を絵に描いたような人。

4月15日（水）

就業日は午前6時50分に起床し、点呼。直ぐに朝餉、洗面を済ませたら作業開始となる。

愈々、今日から本格的な「新入訓練」に入る。日中は「刑務作業」として、舎房内で「袋貼り作業」を行う。これは読んで字の如く、商品を入れる手提げ紙袋の製作で、担当看守の指示を受けた清掃扶と呼ばれる同囚に材料の紙を入れてもらい、各工程に従って紙をゴリ棒（木製の木っ端）で折って、糊で貼るという単純な作業。

入浴は、概ね2週間で5回あって、就業日の朝から輪番で実施される。また運動は、入浴実施日以外の就業日で、朝から輪番で実施。運動時間は、「行動訓練」と称する所内生活に必要な諸動作（整列、行進等）訓練が主であり、これが軍隊式で結構キツイ。

何せ担当の警備隊看守は「当所の行動訓練は、日本一厳しいからな…」と言うのが口癖で、ビシビシ扱（しご）くだけの体のいい懲役虐待じゃあないかと思えん。

大体、一審の公判中から『川越拘置支所』において「結核性胸膜炎」を患い、一昨日までの約10ヶ月を川越と東拘の『病棟』で療養していた身だった故、少し動いただけでも胸がゼイゼイして苦しい。だけど、弱音は一切吐いて堪るか。

4月18日（土）

本日は、半ドン。午前中の「袋貼り作業」で終業。そういえば、誰に聞いたかは忘れたが、半ドンの語源は、『明治から戦中迄は、正午になると空砲を撃っていたので、半日経つとドンで「半ドン」になった』（諸説あるが）というものらしい。午後からの余暇時間は、妻宛に便りを書く。当所に移管された旨、安否状況等を認める（便箋7枚）。

4月23日（木）

朝の始業となって佐々木担当より、「これから雑居房へ転房するので、荷物を纏めて置くように」との指示有り。速やかに荷造りをして待っていると、転房の掛け声が掛かり『分類センター棟2階6室』に移る。雑居房には、40歳前後の「覚せい剤取締法」で懲役2年半をくらった地元ヤクザ一人と、他に堅気が四人。その中の一人が、偶然ながら娑婆で見知っている「関さん」（狭山市在住・六十代）で、他の2人も50歳をとうに過ぎていて、一人だけ30代半ばの囚人がいるものの、矢張り27歳の小生が一番若くなってしまう。

今日は、運動実施日にて「行動訓練」。整列・号令・行進と行うが、ビッシつと全員が揃うまで何度でもやらされる。「袋貼り作業」は、雑居房は自主的に役割分担を決めて作業するので効率は良い。只、作業中の口談は一切禁止であり、作業上必要な口談であっても「報知器」を下ろして、刑務官の許可を受けてからでないと「無断口談」として、取り調べ対象となる。

また、余りにも「無断口談」で何度も繰り返し連行されると懲罰を受けることにもなってしまう。当然如く、部屋の壁に寄り掛っても駄目で、掛け布団の中に顔を潜らせて寝ても夜中に夜勤看守が棒で突っついて起こすというのである。

でも、同房の地元ヤクザ O 氏は宮城刑務所の常連らしくて、係長をはじめ刑務官連中の O 氏に対する態度や言葉遣いが他囚とはあからさまに違い、依怙鼻負するのには腹が立つ。

全く以って、こんな囿囿の内においても不条理はあるのである。

4月28日 (火)

入所して半月が経つ。既に「適性検査・IQ テスト・性格診断・健康診断」等を終えて、今日は『分類審査会議』が行われる。一人ずつ会議室に呼ばれて、工場区の係長、課長補佐、警備隊長、課長、部長と金線を付けたお歴々が面接をする訳だが、これは会議という名を借りた幹部刑務官らが、寄ってたかっては懲役を口汚く罵るという恒例儀式である。

昼の休憩後、小生を含む 6 人が呼び出されて適性検査や講話を受けた教室にて待機。

その場で会議出席の手順を担当の長岡係長から説明され、会議が始まる。どうやら刑期の短い順に呼ばれているようで、小生は最後。小生の番が来て会議室に入室すると、先の長岡係長の「気をつけ、礼」の号令で深々と頭を下げ、続く「称呼番号、氏名」の号令で「2118 番、福山辰男です」と応じる。茲でミソなのが、必ず自分の氏名の後に、「〇〇〇〇です」を付けないと何度も繰り返しやらされるのだ。

会議室はコの字形に長テーブルが据えられていて、手前から係長、課長補佐と奥に行くほど階級が上がるのだが、「管理部長」と呼ばれる所長の次に偉い No.2 が、正面ど真ん中に腕を組んでふんぞり返って座っている。そして、矢継ぎ早に幹部刑務官らの質問が飛んできて、即答するという形式である。

先ず、今回事件を起こしたことに対してどう思っているのかと問われ、やがて本題よりも「福山、お前は今回の仕事はいくらで引き受けたの？」だとか、「前刑の水戸少刑では、集団で乱闘事件を起こして懲罰ばかりくらって、結局は満期まで処遇上（*昼夜独居房での生活）での生活だったじゃあないか」、「ここは長期刑務所だから、お前のような事件で務めている者が沢山いるぞ。ヤクザの抗争だとかさあ、組織の為だからといって直ぐに人を殺め、喧嘩をする様な奴は危なくて工場にはとても下せないなあ」等々。

特に、工場二区の斎藤係長にはボロクソに罵られて、余りにもしつこい為、最後は小川警備隊長が発した「この辺で良いでしょう」の一声で終了となる。待機室に戻ると、会議に立ち会

っていた長岡係長が直ぐ小生に向かって言葉を掛け、「あれは酷い、人を人と思っていない発言だ。私は同じ刑務官として恥ずかしい。福山、悔しいだろうが、これから長い務めだけれども頑張れ。そして今日の連中を見返してやれ…云々」。況してや、他囚の目も憚らずに小生の為に涙を流してくれたのである。あと1~2年で定年を迎えるのであろう老刑務官に、人としての温かさを感じた。小生も他人に優しくできる人間になります。

4月29日(水) みどりの日

免業日(*めんぎょうび)。終日、舎房にてゆっくりと過ごす。この「免業日」なる言葉も獄中用語なのではないだろうか。愈々、明日は工場へと配役になる。昨日のあの屈辱しかない『分類審査会議』において、普通に質問を受けたのが「当所に於いては、どの様な作業に就きたいか」というものだった。此処に入所して以来、小生にも期するものがあり是非とも「印刷工場」でワープロ(写植)作業をやりたいと希望したのだが、無理だろうな。

4月30日(木)

起床・洗面・点呼・朝餉と、獄の朝は忙しく始まる。本日は「工場配役日」ということで、僅かな私物を纏めて静かに舎房で待つ。一昨日審査会議を受けた6人の内、30代半ばの一人は『分類センター棟』の清掃員として配役となり、そのまま居残る。

小生ら5名は若い看守に連行されて、塀と堤で区切られた隧道を潜り抜けて本所地区に入り、そのまま「配役言い渡し」を受ける管理棟(保安課)まで行進。各工区の係長より一人ずつ告知を受けるのだが、小生の目の前には審査会議でボロクソに罵った2区の斎藤係長が立ち、若い看守の「気をつけ、礼」の後、「称呼番号、氏名」の号令で、「2118番、福山辰男です」と応じると、「今日から君は第13工場に配役となる」と告知を受ける。

因みに、宮城刑務所の一般工場区は1工場から15工場まであり、工種は木工(1・2工場)、洋裁工(4・12・14工場)、革靴工(5・6・7・8・11工場)、印刷工(10・13工場)、溶接工(9工場)、軽作業工(3・15工場)となっている。13工場は、本所地区東側に位置する二階建ての新工場棟(4ヵ工場区分)にあり、10・11工場が1階、12・13工場が2階に入っている。

午前10時、印刷工場「写植文選工」としてワープロ(3班)に配役となる。工場担当の板橋看守部長は、大変温厚で細かいことは一切言わない人。懲役囚の間でも「仏の板さん」と言わ

れていると計算扶から聞く。夕方、無事に作業を終えて今日から生活をする『2舎2階6室』に還房（*舎房に戻る）。此処は雑居房の9人部屋で、小生が入って9人となり定員だ。

尚、同房の面子は2人の短期刑を除いては、懲役5年と7年が各一人ずつで、残る4人が長期刑である。ヤクザは「沖縄抗争」で3代目旭琉会と対立した沖縄旭琉会系のG氏のみで、20歳の時に対立する組員へ向けて拳銃を発砲し、殺人未遂罪で懲役10年をくらい、現在は23歳との事だ。他には元ヤクザである無期囚が2人居て、既に1人が16年、もう1人の方が12年を務めているという。況してや、12年を務めている方が「福山さんは満期があつていいね。残刑期10年なんてあつという間に経っちゃうから…」と、こちとら漸く、娑婆復帰への第一歩を踏み出したというのに、あっさりと簡単に言われてしまう。

しかし、宮城は長期（LB）刑務所故、皆さん寄せ場生活が長くて、更に新入りも偶にしか入って来ないので娑婆の情報に飢えている。だから現況がどうなっているのかを事細かく聞いて来るので、小生もなるだけ丁寧に説明をしているつもりだが、その都度質問が返ってくるのと、それを理解させるだけでも話がかみ合わず辟易する。

また、小生の渡世上の親で高島義雄親父（住吉会川越平塚一家四代目総長）と親しく、住吉の「15日会」のメンバーでもあるA親分（住吉会親和会光京一家邑楽貸元）が隣の舎房に居り、工場では同じワープロ作業に従事するというのも、これも何かの縁ではないかと思う。

5月1日(金)

本日付けで、とうとう獄中においても「完全週休2日制」となる。過日読んだ『読売新聞』朝刊の記事にも、識者達が賛否両論・喧々諤々の意見を述べていたが、犯罪を犯して懲役を務める者に「週休2日制」なんて以ての外だというのだが、要は個々の時間の使い方次第ではないか思うのだが。そもそも己に志さえあれば、これはこれで有意義なる週休2日制となる筈で、「10年のたとえ1日と雖も決して疎かにすること勿れ」である。

作業は、終日（ひねもす）ワープロのキーボード操作練習をする。

5月2日(土)

週休2日制になったの初免業日。尚、免業日の起床時間は、午前7時20分で就業日より30分遅い。午前10時から11時半迄、慰問演芸の有り。津軽三味線奏者・歌手で吉幾三の兄貴分

である『二美仁ショー』が講堂にて催される。本人が爪弾く津軽三味線の演奏からショーが始まる。今回は、何処かの組織が入れた慰問ではないようで、二美仁と現教育課長が前の施設に居た頃からの縁で、慰問演芸が実現したようだ。そして、久々に若い女性を間近で見る。

5月3日(日) 憲法記念日

ゴールデンウィークも半ばとなり、午前中の余暇時間はラジオ視聴。

午後1時からのテレビVTR視聴は『日本海大海戦』を視聴する。日露戦争中の1905年(明治38年)5月27日から5月28日にかけて、日本海軍の連合艦隊とロシア海軍のバルチック艦隊との間で行われた世界三大海戦を主に、旅順封鎖作戦、二百三高地の攻防を描いた1969年公開・東宝配給の超大作である。

(出演：東郷平八郎大将に三船敏郎、広瀬少佐に加山雄三、明石元二郎に仲代達矢、乃木希典大将に笠智衆、明治天皇に初代松本白鷗ほか)。

5月5日(火) 子供の日

連休最終日。午前中はラジオ視聴。妻宛に便りを認める(便箋7枚)。

午後1時から3時迄、テレビVTR視聴有り。

『釣りバカ日誌3』1990年暮れに公開・松竹配給のドタバタコメディ映画。今回のロケ地は、静岡県賀茂郡西伊豆町。(出演：西田敏行、石田えり、谷啓、五月みどり、三國連太郎ほか) 日頃、大声で笑うことが許されぬ獄中において、これは堂々と笑える事が出来る作品。

5月6日(水)

連休明けの出役となり、本日より「写植文選工」として簡単なワープロの文字入力作業を始める。また、賞与金の教示有り。分類センター(考査期間)における「袋貼り作業」にて209円也。これが、宮城刑務所で初めての賞与となる。

※賞与金は、刑務作業に従事している時間のみで、それ以外の「入浴・運動・適性検査・講話・面会」等の時間は歩引きされて計算される。

5月7日(木)

工場定期発信日につき、妻宛に便りを出す。作業は、終日ワープロ作業に従事する。

5月20日(水)

東京拘置所より持ち込みたる、日用品類(宮城刑務所における審査会の結果「製品規格外」の為、使用が叶わない石鹼やタオル等…)を次回面会時の『面会宅下げ願』願箋を妻宛で記載、提出をする。尚、ワープロ作業は同囚である指導工や熟練工に教えを受けながら、少しずつ戦力となりつつある。

5月25日(月)

起床時から微熱があり、朝工場に出役して直ぐ担当の板橋看守部長に体調不良を訴え、工場備え付けの体温計で熱を測り「医務診察」を願い出る。

午前10時過ぎ、若い看守に連行されて医務分室へ。改めて診察待合室で体温を測ると、更に熱が上がっており、担当医師の診察結果は風邪症状の為、午後から入病(にゅうびょう)と言われ還工(*工場に戻る)。

工場食堂で昼食を終えて、午後の作業を開始して直ぐに病舎へと連行する看守の迎えがあり、2舎2階6室の自室に寄って「タオル・石鹼・歯ブラシ・歯磨き粉・ちり紙・箸・箸箱」と私物を持って病舎へ。1病棟1階10室の独居房にて休養。病棟における風邪での休養期間中は本及び新聞紙の閲読、そして筆記等は一切禁止され、只管療養に努めねばならない規則になっている。従って、暫くは『獄中日記』の記載も中断である。